

商取引文書から見た山方荷主町田家の西川材取引

―町田屋歌助店との取引を中心として―

丸 山 美 季

はじめに

武蔵国秩父郡上名栗村（現埼玉県入間郡名栗村）町田家は、世襲名主を勤め、炭・材木商売を中心として穀物・日用品商売なども営む西川林業地帯の代表的な山村豪農として知られている。同家は、材木伐出・流送に関わるだけでなく、寛政期に江戸に材木問屋の店を出し直接取引をはじめていく。

町田家が残した文書は膨大な点数にのぼり、学習院大学史料館で目録を継続して作成中である。⁽¹⁾この町田家文書の中には、西川材の江戸材木問屋との取引過程で発生した仕切状などの取引文書が大量に含まれている。町田家やその経営については、山中清孝氏、加藤衛弘氏の研究がある。⁽²⁾また、筆者は前稿で町田家の江戸材木問屋の出店について検討した。⁽⁴⁾しかし、西川材取引の実態については、いまだわかっていないことが多い。

これまで仕切状などの取引文書は、年月日が入っていないため年代を特定できない、また帳簿に転記されてしまえ

ば不要になるため網羅的に残っているわけではない、などの理由から、研究にあまり使われたことはなかった。⁽⁵⁾しかし、近年では、そうした取引文書にも実際の取引に関する情報が多く含まれていることが着目され、それを活用した研究も見られるようになってきた。⁽⁶⁾

仕切状などの商取引文書をこまかく分析し、あわせて帳簿を見ていくことによって、より具体的に西川材の流通の姿が描けるのではないだろうか。そこで、本稿では、その基礎的作業として、残っている取引文書から、西川材の具体的な取引の様相を少しでも明らかにしようと試みた。

以下では、江戸材木問屋町田屋歌助店との取引文書を中心に西川材取引の流れを追ってみることにする。また、町田屋歌助店は天保期に出した町田家の江戸材木問屋の出店の一つであり、小稿はその一つの紹介でもある。

一 町田家の材木取引先

ここでは、本論に入る前に、町田家がどのような商人と取引をしていたのかを仕切状などの取引文書を用いて見ておきたい。町田家文書中の水揚状・仕切状など四六八点⁽⁷⁾から作成したのが、表1町田家と取引があった材木商人名の一覧である。これによると、町田家の取引先は、大きく分けて①江戸、②千住、③飯能や川越などの近隣地域、の三つに区分することができる。

第一に江戸の材木問屋との取引をとりあげる。そして、さらに江戸との取引では、町田家の出店とそれ以外の店とに分けられる。

商取引文書から見た山方荷主町田家の西川材取引

表 1 町田家と取引があった材木商人名一覧

No.	地域	商人名	所在地	備 考	数	
1	江戸	町田家出店	町田屋栄助	浅草今戸	竹木炭薪問屋（川辺問屋）	92
2			藤田屋喜助	浅草今戸	竹木炭薪問屋（川辺問屋）	87
3			町田屋安助	深川久永町	竹木炭薪問屋（川辺問屋）	134
4			町田屋太助	深川東平野町	竹木炭薪問屋（川辺問屋）	19
5			町田屋歌助	深川亥ノ掘	板材木問屋・熊野問屋組合	8
6			町田屋治兵衛	浅草山之宿町		1
7		出店以外	近江屋伊三郎	築地南飯田町	板材木問屋・熊野問屋組合	1
8			堺屋七五郎	本所菊川町	竹木炭薪問屋	7
9			葛西屋伊三郎	本所五ッ目	竹木炭薪問屋	1
10			山形屋甚右衛門	本所柳原3丁目	竹木炭薪問屋	2
11			大坂屋庄三郎	本八丁掘2丁目	板材木問屋・熊野問屋組合、川辺問屋	3
12			大国屋勝五郎	深川横堀扇橋町	竹木炭薪問屋	3
13			杉嶋屋勘兵衛	江戸東八丁掘2丁目	竹木炭薪問屋	1
14			花屋金蔵	豊岸嶋川口町		5
15			花屋仁兵衛	深川木場		2
16			野村屋清助	深川久永町		1
17			上総屋清右衛門	深川東平野町	板材木問屋・熊野問屋組合、川辺問屋	9
18			山本屋半兵衛	木場	深川木場材木問屋	1
19			伏見屋猛三郎	深川三好町	板材木問屋・熊野問屋組合、川辺問屋	12
20			利倉屋長左衛門	浅草新鳥越	材木仲買カ	1
21			越前屋定七	浅草	材木仲買カ	1
22			木屋新次郎	浅草橋場	竹木炭薪問屋	2
23			伊勢屋新兵衛	浅草橋場町	竹木炭薪問屋	4
24	千住	万屋長右衛門	千住小塚原	竹木炭薪問屋	1	
25		堺屋藤右衛門	千住大橋際	炭薪仲買（棧宿）	30	
26		熊野屋安兵衛	千住南大橋際	炭薪仲買（棧宿）	1	
27		木屋文左衛門	千住大橋際	炭薪仲買（棧宿）	1	
28		堺屋市右衛門	千住大橋際		5	
29	飯能その他	竹屋伝兵衛	千住橋戸町	炭薪仲買（棧宿）	1	
30		なりた屋金兵衛	川越南町		2	
31		植野屋乙五郎	川越		2	
32		金子重助	飯能南入口		6	
33		麻屋伊八	飯能		8	
34		堺屋又右衛門	飯能		6	
35		植野屋乙五郎	戸田川岸		2	
36		豊田屋金兵衛			1	
37		日高屋伊三郎			1	
38		下総屋重五郎			1	
39	材木屋佐九右衛門	釘無		3		
合 計					468	

注) 町田家文書中「仕切状」・「水揚状」などより作成。

所在地は印の肩書きによる。

備考の問屋名については、「江戸商人名前一覧」(『三井文庫論叢』第6号、1972年)を使用。

()内については筆者による。

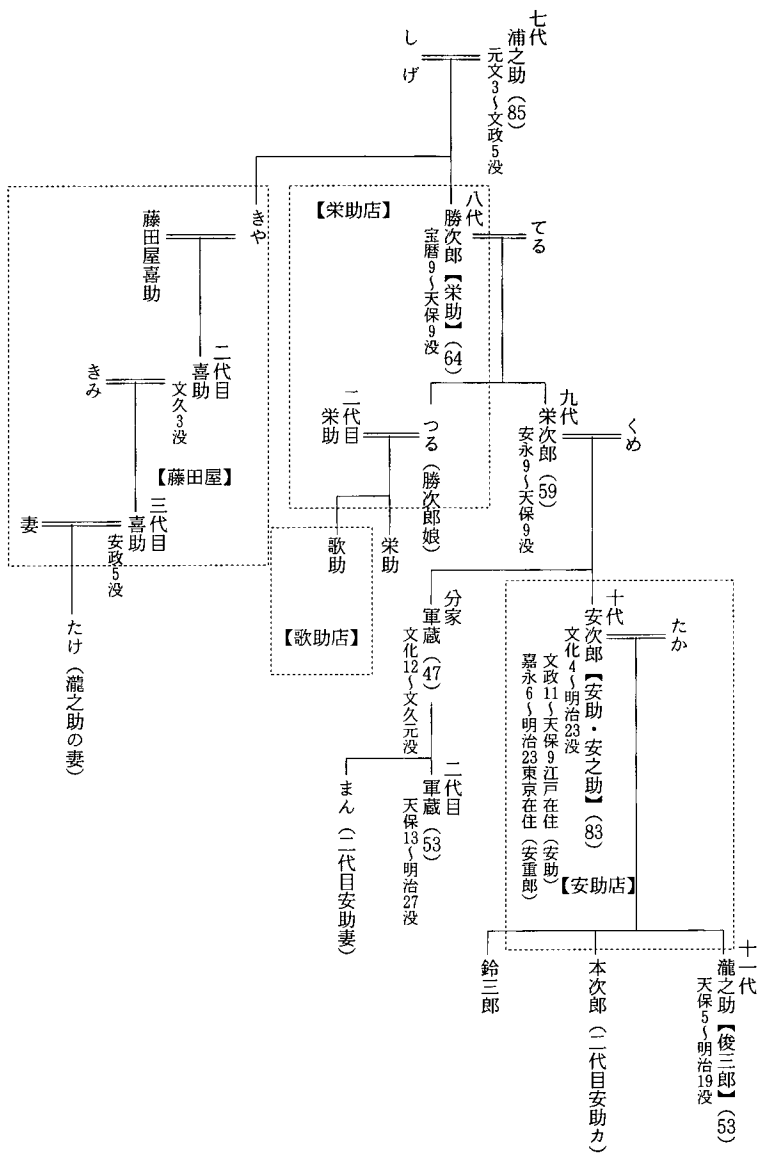
まず、ここで江戸材木問屋について簡単に説明しておきたい。⁽⁸⁾江戸材木問屋は、大きく分けると、①深川木場材木問屋②板材木問屋・熊野問屋組合③川辺問屋の三つに分けられる。①と②は主に「下り荷」(公用材)を扱う問屋で、③は関東の奥筋からの材木・炭薪などの「地廻り荷」(民間材)を扱うという違いがあった。

さて、町田家の出店は、はっきりわかっているだけでも五軒あった(図1参照)。町田家は、寛政五年(一七九三)に川辺一番組古問屋株⁽⁹⁾を取得し、浅草今戸町に町田屋栄助店を開いている。⁽¹⁰⁾また、いつ出店されたかは不明だが、寛政十二年(一八〇〇)に七代目浦之助の娘婿である藤田屋喜助は店を譲り受けており、少なくともそれ以前に藤田屋は存在したことがわかっている。⁽¹¹⁾ついで文政十一年(一八二八)には、町田家にとって三軒目の出店の安助店が深川久永町に開かれた。⁽¹²⁾また、天保期には、深川東平野町に町田屋太助店と後で紹介する町田屋歌助店が開かれていた。⁽¹³⁾その外に、炭を中心に扱っていた浅草山ノ宿町に町田屋治兵衛店という店があったようである。⁽¹⁴⁾仕切状の残存数からも窺えるように、これら自家の出店との取引は、町田家の取引上大きな位置を占めていたと思われる。

一方、町田家の出店以外の江戸での取引先は、場所的に見ると本所、深川、浅草の地域に分けられる。また、ほとんどの取引先は、江戸地廻りの荷物を扱う川辺問屋である。中には、板材木問屋・熊野問屋組合と川辺問屋の両株を持っているNo.11の大坂屋庄三郎やNo.17の上総屋清右衛門、またNo.18の山本屋半兵衛のような下り荷を扱う深川木場材木問屋との取引もみられる。

第二に千住との取引をみておく。ここに名前があがっている万屋・堺屋・熊野屋は筏宿を営んでいた。千住の筏宿は、江戸材木問屋までの筏の廻送を受け持っていた。⁽¹⁵⁾材木は、山方―問屋―仲買―消費者という経路で流通させることが決められており、問屋を通さずに仲買が山方と取引する「出買」や、問屋が仲買を通さずに消費者と直接取引する「出売」は禁止されていた。しかし、千住の筏宿と山方との直接取引はたびたび問題となっている。⁽¹⁶⁾この表から町

図1 町田家略系図



注) 名主町田家系図(山中清孝『近世武州名栗村の構造』
218頁)をもとに、過去帳・町田氏系図等により作成。
()内は死亡時の年齢。

田家と千住の筏宿の間では取引があったことからわかるように、その規定は守られていなかったことが窺える。

第三は、飯能・釘無など上名栗村と近い地域との取引である。町田家は、炭については江戸よりも飯能での取引を中心としていたことが指摘されているが、表により材木の取引も行われていたことがわかる。また、川越の商人との取引もあったことが注目される。

以上、町田家の取引先としては、まず江戸、そして自家の店が最も大きな位置を占めていたといえるだろう。この点からも町田家の材木商売は、自家の店との取引を中心として、生産―搬出―販売（途中まで）を一貫して行うことにより発展していったことが窺える。

二 西川材取引の実際―町田屋歌助店との取引を事例として―

（一）町田屋歌助店について

まず、町田屋歌助店について見ておこう。

町田屋歌助という人物は、二代目町田屋栄助の次男である（図1参照）。歌助店は、天保期には深川亥ノ堀（大横川）の辺りに開かれていたことはわかっている。次に、出店時期やその経緯を知る手掛かりとなる史料を紹介しておこう。⁽¹⁸⁾

次の史料は、天保四年（一八三三）八月に、今戸の栄助から上名栗村（本家）の栄次郎に出された書状の一節であ

る。

(前略)

尚又此節安助様御世話ヲ以亥ノ堀江置借受、売場差出し候積ニ御座候、尤此段御窺申上候間可仕候処、洲渡之沙汰も御座候故右用意ニ相初メ置度奉存候、右ニ付安助様種々御深切ニ御世話被成下難有仕合ニ奉存候、先者右申上度早々如斯御座候、已上(後略)

すなわち、この度は安助様の世話で亥ノ堀に置場を借りうけて売場を出す手筈になっている。もっとも、このことをそちら(名栗本家)へ相談したところ、出しても良いとのことなので、洲渡の指示もあるため、その用意からはじめておきたいと思っている。安助様には、いろいろと面倒をみてもらって有り難く思っている。まずは、以上のことをお知らせする、という内容であった。

この書状は、栄助が新たに亥ノ堀に売場を出すことを報告したものであるが、ここでいう新たに出された売場というのが歌助店だったのではないだろうか。推測の域を出ないが、これにより天保四年が歌助店の出店時期と考えられるのではないかと思われる。この店の出店については、浅草今戸町の町田屋栄助店が深川に支店を出したような印象を受けるが、新たに店を出すのには本家の承諾を得ていたことがわかる。また、町田家の深川の出店である吉永町の安助の手蔓で置場を借りている点が注目される。

歌助が開業していたのは、板材木問屋・熊野問屋組合の店であった。板材木問屋・熊野問屋組合は、宝暦年間(一七五一―一七六四)に難破船の流材処理のために協力しあったのがきっかけとなり、板材木問屋と熊野問屋が連合してできたものである。⁽¹⁹⁾板材木問屋は駿府・遠江・三河・尾張方面からの角材・板・貫などを扱うことからその名で呼ばれ、熊野問屋は、大和北山郷・十津川郷で生産され熊野新宮から回漕された材を扱う問屋として発生したという。いずれ

も主に「下り荷」を扱う問屋であった。歌助店以前に町田家が出した店は、すべて「地廻り荷」を扱う川辺一番組古問屋であった。ここで、初めて板材木問屋熊野問屋組合の株を持ったことは、「下り荷」の扱いも積極的に行おうとした意図のあらわれかと推測される。

歌助店については、天保の株仲間解散中の間のことは全く分からないが、株仲間再興時の板材木問屋熊野問屋組合の名前帳には名前が書き上げられている。⁽²⁰⁾ それには、「深川嶋崎町平吉地借町田屋歌助」とある。その後、慶応二年（一八六六）、歌助は本八丁堀二丁目五人組地借田中屋万右衛門に株を譲り渡し、この段階で歌助店は閉店したものと思われる。

（二）江戸材木問屋の口銭取引規定

江戸市場における材木の流通経路は、山方荷主―材木問屋―材木仲買―消費者という流れになっていた。山方荷主と江戸材木問屋との間の取引については、山方荷主は問屋に販売を委託し、問屋は委託された荷物を仲買へ販売し、その売上金から口銭・諸掛りを差し引きして荷主へ仕切金を支払うというしくみであった。

ここでは、実際の仕切状などを見ていく前に、江戸材木問屋による口銭・諸掛りの規定について説明しておきたい。江戸材木問屋の口銭・諸掛りについては島田錦蔵氏による一連の研究がある。⁽²¹⁾ 江戸材木問屋の中で唯一残っている川辺一番組古問屋に伝来した史料の翻刻が『江戸東京材木問屋組合正史』⁽²²⁾に収められている。その史料の分析から、島田氏が明らかにした江戸材木問屋の口銭・諸掛りの定型についてまとめておく次のようになる。口銭・諸掛りは、挽木（製材品）の場合、①売手（口銭）、②取減、③極賃（屋外）または蔵敷（屋内）④上金替の四要素からなり、

この中で「売手」が狭義の口銭であり、他の三つが諸掛りで、取減は数量の減失補償、上金替は両替手数料だという。また、筏の場合は槌賃の代わりに揚賃があるとされている。

この島田氏の研究をふまえつつ、以下では『江戸東京材木問屋組合正史』に載っておらず、これまで研究に使用されてこなかった、天保十年（一八三九）の川辺問屋規定の中に出てくる仕切仕法の事例をとりあげ紹介してみたい。⁽²³⁾これは、「堅川筋深川辺ニ住居致、炭・薪其外都而奥川荷物重ニ取扱候問屋共」が中心になって取り決めた「川辺問屋規定帳」という表題の規約の中にのっているものである。表2は、その口銭・諸掛りなどに関する取り決めにまとめたものである。これによれば以下の通りである。

この時の仕切立は、仕切金の計算をする時に金一両を銀五十六匁で換算し、端銀を銭時相場より一割半引きで計算することが決められていた。当時の貨幣制度は、金貨・銀貨・銭貨が併用される三貨制度であり、材木の取引は金建て、口銭・諸掛りや運賃などの立替払いは銀建て、または銭建てで支払いを行うことになっていた。そのため、口銭・諸掛などを銀に換算する関係から、「金は銀何匁」かを決めておく必要があったのである。元禄十三年（一七〇〇）に公定相場は金一両六十匁、口銭四匁と定められたが、日々相場は変動してその計算は複雑であった。そのため、江戸材木問屋は、金一両につき五十六匁と固定して、口銭取引の簡略化を図っていたのである。金一両を六十匁のレートで換算するのに比べると、材木問屋にとっては金一両を銀五十六匁で換算する方が有利であり、このような金銀相場を利用して出た差益が問屋の重要な収入源になったといわれる。

口銭・諸掛りは、①奥川西川筋、②諸国（①以外の荒川・利根川上流域の河川輸送地域）、③海手（伊豆・相模などの海上輸送地域）の場合と三区に分けられていた。ここでは特に、本論文で対象とする西川材の場合を取り上げ見ておくと、さらに薪荷物と筏荷物で口銭の額が違っていることがわかる。薪荷物口銭は、「売手・取かん銀」・

表 2 仕切仕法 (天保10年)

荷物仕切立仕法

小判60目

銀56匁割

端銀銭時相場より 1 割半引

奥川西川筋	薪荷物口銭	金 1 両に付 売手取かん銀 3 匁 6 分 当座地代 2 分 新規増地代 3 分 ノ 4 匁 1 分定 外に束物金 1 両に付銀 3 分ずつ 右口銭の外揚せん 金 1 両に付銀 2 匁ずつ受取
	筏荷物	
諸 国	炭口銭	金 1 両に付 売手取かん銀 3 匁 6 分 苫代 6 分 縄代 3 分 ノ 4 匁 5 分定
	炭口銭 常陸茨城郡 新治郡 行方郡 川内郡	金 1 両に付 売手取かん銀 4 匁 4 分 当座地代苫代 2 分 縄代 ノ 4 匁 6 分 運賃切質 金 1 両に付銀 8 分ずつ定
海 手	薪荷物口銭	金 1 両に付 銀 3 匁 6 分定 但、端永銀52匁割 端銀 1 匁に付銀60文
	薪揚置地代 竹木板材木類 筏荷物	金 1 両に付 銀 2 匁定 金 1 両に付 銀 3 匁 6 分定 口銭の外 2 匁ずつ増受取
仲買より 売ヶ輪口銭		金 1 両に付 長木 銀 1 匁 6 分ずつ 挽物 1 匁ずつ

出典)「已亥天保十年十月吉日川辺問屋規定帳」より作成

「当座地代」・「新規増地代」から構成されている。売手とは純粹な口銭で、取かんは材を積んだ時に目減りする分の見込み代償といわれている。売手・取かんは、一両（五十六匁）につき三匁六分だから約六パーセントにあたる。また、「当座地代」・「新規増地代」は、店の前の川岸や明地を借りて薪荷物を置いて保管していたことから保管料ではないかと考えられる。これをあわせると、口銭は約十パーセントになる。筏荷物の場合には、これに材木を河岸揚げする時にかかる「揚せん」が加わり、薪荷物より口銭が高くなっている。

いっぽう、もう一つ問屋の収入としては、仲買からとる「売ヶ輪口せん」があった。これは、材木問屋に特徴的なものだといわれている。寛文・延宝期に問屋と仲買が分離した時に材木問屋が山方との取引を担当することになったので仲買はいながらにして商品を手に入れられるようになったことから、礼金として支払われるようになった制度だという。

以上、本節では、具体的に仕切状などを見ていく前に、天保十年の江戸材木問屋の口銭・諸掛りの規定の事例を示した。

（三）西川材の取引手続き

それでは、実際に町田屋歌助店との取引文書を中心に、西川材が江戸材木問屋の手に渡るまでの流れを取引の過程で発生する文書から追ってみることにする。

① 送り状

筏に組まれた材木は、山方の筏乗によって名栗川―入間川―荒川と川下げされ江戸へ運ばれる。具体的には、飯能河原で赤工茂八や野田仁兵衛らのような「筏中継業者」⁽²⁴⁾と呼ばれる者に引き渡され、千住まで乗り下げられた。千住には「筏宿」と呼ばれる廻送業者があり、さらにそこで継ぎ変えられ、隅田川を下り堀割を通過して深川木場などの材木問屋まで送られた。

筏乗人は、どこの材木問屋に送るか行先が書かれた山方荷主からの送り状を持ち、それと共に荷物を届けた。送り状とは、送った材木の内容を証明するために出される文書である。また、送り状に書かれた店以外に持っていくことは厳重に禁止されていた。しかし、少しでも高く買ってくれる問屋を探して、宛名と違う問屋に持っていくなどの行為が現実には横行していたようである。⁽²⁵⁾

江戸に到着した筏は、送り状と照合され、過不足がないか改めを受け、運賃や内金が渡される。次に、歌助店へ宛てた送り状は現存していないので、名栗の老家町田瀧之助から町田屋安助店へ出された送り状を示す。

〔史料1〕⁽²⁶⁾

贈り状之事

一、^(中) 枰拾式枚也

野田仁兵衛

内

九拾八本

杉丸太

七本

檜丸太

六本

切杉

七拾四束

杉大貫六ノ

内三拾四束

せなし

八拾束

杉皮六ノ

右之通り荷物相贈り候間、着節御改御請取可被成候、以上

亥七月廿八日

名栗

町田瀧之助印（武州名栗・金銀不用・印・新館）

深川木場

町田屋安助殿

まず、筏荷物について簡単に説明しておこう。筏の単位は、一対が一番大きい単位で、ふり、枚と続く。筏一対は、おおよそ二八〇〜三〇〇本位の材からなり、一ふりは四〇〜五〇本、一枚は一五本位からなるものだった。また、筏一対は、二十四枚に相当し、大きさは幅四間（七・二メートル）、長さ二〇間（三十六メートル）位だったという。²⁷⁾筏の上には、史料にあるように「杉大貫」といった製材品や「杉皮」などの上荷が載せられた。なお、貫とは小幅板のことで、大貫・中貫・三寸貫・小貫などの種類があった。上荷の数量の数え方は、例えば「杉大貫六ノ」とあるが、杉大貫六枚で一束を意味した。このように様々な種類・規格の上荷は束という単位で数えられた。また、「せなし」とあるのは、上荷の等級を示しており、ほかに赤身・節なしなどの区別があった。

この送り状には、筏数量（十二枚）とその内訳、筏乗人の名前（野田仁兵衛）・差出人・届け先（荷受け人）が記され、末尾に荷物が到着次第改め、受け取るようにとの文言が入っている。

② 仮水揚

筏が江戸材木問屋に着くと送り状に明記された内容と実際の材木種類・数量が改められる。この時出されるのが、「仮水揚」または「覚」という表題の文書である。これらをここでは一括して仮水揚と読んでおく。筏の数量、その内訳、上乗人の人名が記され、問屋が間違いなく筏荷を受け取ったことを山方荷主に報告するためのものである。もし、この時に荷物 of 過不足や不良品があったらここでチェックされ、これに記された。また、この時に運賃を立替払いしたことも記された。

ここで、例にあげるのは、町田屋歌助店から新館（町田本家）へ送られた仮水揚である。

〔史料2〕⁽²⁸⁾

覚

一、筏式枚

〔山印〕

内わけ

式拾式本

杉小丸太

四本

栗角
二ノ四寸

内

壹本

丈ノ四寸

壹本

丈三五分

六束

杉中貫八ノ

八束

同三寸貫十二ノ

内

四束せなし

壹束十巻

貳束 杉八分せ

六寸十

内巻束五寸十二

ノ

一式百廿四文 千住のり

一金貳朱也 上乘金

一金壹両壹分 内金渡

右之通内金御渡し申上候、已上

四月十七日

町田屋

歌助^⑩(深川亥ノ堀・^⑤・町歌)

新館様

これには、筏二枚を受け取った旨と、千住のり・上乘金(運賃)と内金が渡されたことが記されている。

運賃は、最終的には山方荷主の負担であったが、江戸材木問屋が立て替えて支払っていた。運賃は、ここでは、「千住のり・上乘金」の二つとなっている。ちなみに、天保期の筏一双の運賃の標準は、千住乗二貫七百文、上乘金

二分であった。⁽²⁹⁾ 上乗金は山方から千住まで、千住乗りは千住から江戸の材木問屋までかかった運賃だと考えられる。なお、細かくは「上乗金・千住乗り・堀乗」の三つに分けて記されることもあった。⁽³⁰⁾ また、運賃の額は、千住・浅草・深川と材木問屋の店がある場所によって違いがあったようである。たとえば、浅草今戸の栄助や藤田屋喜助に送られた筏一双の運賃は、千住乗九〇〇文、上乗二分という場合が多く、深川までの運賃より安かった。⁽³¹⁾

また、ここでは「内金一両一分」が支払われている。内金とは仕切前に支払われる見込み金のようなものであると思われる。元来、山方荷主側は、最初は無条件で材木の販売を問屋に委託していたが、次第になるべく多くの内金を支払ってくれる問屋と取引を行うようになり、指し値で販売を委託するようになることが知られている。⁽³²⁾ この史料以外の町田家文書中の仮水揚げ仕切状でも、仕切前に内金が払われている場合が多くみられる。

③仕切状

仮水揚げを出した後、問屋は材木を売り捌くと売上金の中から口銭・諸掛り、運賃や内金などを差し引いて仕切金を渡す。その明細が書かれたのが仕切状である。

次に示す史料は、「史料2」で見た四月に水揚げした筏の仕切状である。仕切は二ヶ月後の六月に行われている。なお、中には「直仕切覚」という表題の仕切状が見られる。それは水揚げ後数日で仕切が行われた場合に出されるものだった。⁽³³⁾

〔史料3〕⁽³⁴⁾

仕切

未ノ四月十二日入

一筏貳枚也

山印黒もの

内訳

貳拾貳本

杉丸太

代金三分也

四本

栗角

内

貳本 ニノ四寸代 六匁貳分貳厘

十八本かへ

壹本 丈ノ四寸代 壹匁八分六厘

三拾本かへ

壹本 同三五分代 壹匁貳分四厘

四拾五本かへ

六束

杉中貫八匁

(中略)

金壹両三分ト

貳匁六分壹厘

内

一貳百廿四文

千住のり

(ゴシック部分は史料2に対応)

一金貳朱也

勘定出

上乘金

一金壹兩壹分也

右内金

一拾匁六厘

口せん

小以

ノ金壹兩貳分ト

五匁三分

差引

ノ拾壹匁三分壹厘

渡り

右之通御荷物仕切銀相渡

此表無出入勘定相済申候、已上

天保六末年

町田屋歌助印（深川亥ノ堀・土・町歌）

六月

町田米次郎殿

材木の本数の左側に小さくたとえば「十八本かへ」と書かれているのは、一両につき何本かえという表示である。

筏二枚の売上代金が一兩三分と二匁六分一厘で、口銭・運賃・内金を合わせた額一兩二分と五匁三分がそこから差し引かれ、残銀十一匁三分一厘が最終的に歌助から栄次郎に支払われた。つまり、山方荷主の収入は、先に支払っていた内金と残銀を合わせた額一兩一分と銀十一匁三分一厘であった。一方、問屋の利益を見ておく。この時の口銭は、十匁六厘で売上代金の約十パーセントになり、諸掛りなども含まれた額になっている。他の史料では、「売手」・「揚極賃」など口銭の中身が分けて別々に記されている場合もある。⁽³⁵⁾

こうして仕切が済むと、上名栗村本家から江戸へ遣わされた者や筏中継業者などに仕切金は託されて名栗に送られた。⁽³⁶⁾

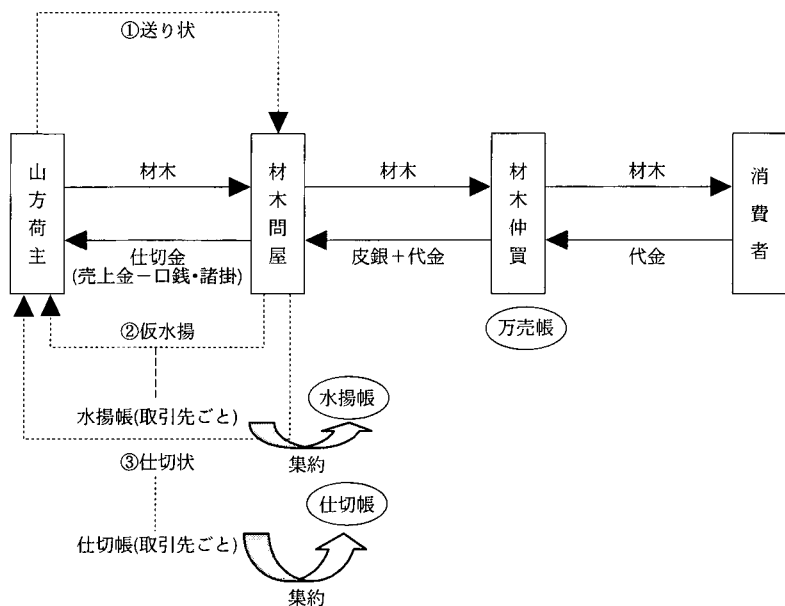
おわりに

以上、町田家の江戸出店の紹介も兼ねて、町田屋歌助店との取引を事例として、西川材取引においてどのような文書がやりとりされていたかについて見てきた。山方と江戸材木問屋との取引の流れの具体的な様相の一端を示すことができたのではないかと思われる。

最後に、材木（商品）・代金の流れとそのやりとりで発生した文書の流れを図示すると次のようになる。

仮水揚や仕切状などが蓄積されると、それらは転記されて取引先別に水揚帳・仕切帳が作られた。その後、さらにそのような取引相手ごとに作成された帳簿を集約した水揚帳・仕切帳が作られたと考えられる。また、仲買との間では「万売帳」という帳面が作成された。

図2 近世材木流通経路 ―荷物・代金と取引文書の流れ―



しかし、本稿では、こうした仕切帳などの帳簿の分析や取引文書と帳簿との関係について検討を行うことができなかった。また、仲買との間ではどのような文書がやりとりされていたのかについても触れることができなかった。今後の課題としたい。

註

- (1) 「武蔵国秩父郡上名栗村町田家文書」は、学習院大学に所蔵されている。これまでに整理が終わった部分については、『武蔵国秩父郡上名栗村町田家文書(一)・(二)・(三)・(四)・(五)』(学習院大学史料館所蔵目録第八・九・十一・十三・十六号、一九八六年・一九八八年・一九九二年・一九九六年)が刊行されている。本論文では、この史料を以下引用するときは「町田(町田家文書の略)番号」とする。また、目録未収載分については、現段階での整理番号であらわす。
- (2) 山中清孝『近世武州名栗村の構造』(名栗村教育委員会、一九八一年)。
- (3) 加藤衛弘(a)「江戸地廻り山村の豪農経営―武州西川町田家を中心として―(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和六十一年度、一九八六年)、同(b)『山村経済の史的構造―武州西川林業地域の分析―』(筑波大学博士(農学)学位論文、一九九四年)。
- (4) 拙稿「近世西川地方における山方荷主町田家の江戸材木問屋経営―文政期の深川への出店を中心に―」(『学習院大学人文科学論集』5、学習院大学人文科学研究科、一九九六年)。
- (5) 仕切状など商取引文書の基本的な形式などについて古文書学的見地から紹介したものに作道洋太郎「取引・証文・経営・帳簿」(『古文書学講座七 近世Ⅱ』雄山閣、一九七九年)がある。
- (6) 斎藤善之氏や曲田浩和氏によって海運史料論における仕切状論の必要性が指摘されている(『知多半島歴史研究の十年』(日本福祉大学知多半島総合研究所、一九九八年、一四八―一五〇頁)。
- また、実際に仕切状を使った研究として、原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、一九九六年、三〇五―三五七頁)がある。干鰯問屋の浜方との仕切状を考察し、問屋・浜方関係の見直しや取引の構造などを明らかにしている。この研究の視点に本稿は多くを学んでいるが、今回は材木取引の流れを追うにとどまり、そこまで踏み込んだ検討ができていない。今後の課題としたい。
- (7) 現在、確認されている分であり、今後、整理が進めばさらに増える可能性がある。また、年代が確定できないものが多いが、町田家の江戸進出後の寛政期以降、文化・天保期の仕切状類が大部分であると推測される。
- (8) 島田錦蔵「川辺耆番組古問屋組合文書と江戸材木市場」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十一年度、一

九七六年) など。

(9) 川辺一番組古問屋は、享保年間に大岡越前守より名乗ることを許され、木場に一株を持ち角物・榑木など材木を扱えるという川辺問屋の中でも特権的な存在だった。

(10) 町田五四一、五四一四など

(11) 町田六六一一五、六六一一〇など

(12) 町田六五二三

(13) 町田Xうー一〇八など。町田屋太助は、町田家の系図には出てこない。ただし、太助が上名栗村の栄次郎に出した書状の宛先が「御尊父様」となっているので、栄次郎と親子関係にあると推測される。しかし、確かなことは不明である。

(14) 町田六四一三など

(15) 『新修荒川区史』(荒川区役所、一九五五年) 五四二〜五四四頁。

(16) 島田錦蔵「幕藩体制下の江戸材木商の商体」(二)(徳川林政史研究所『研究紀要』平成五年度、一九九五一年) 八一〜八二頁。

(17) 註(3) 加藤前掲論文(b) 一六六頁。

(18) 町田①と一五六一十七

(19) 註(8) 島田前掲論文四五頁。

(20) 嘉永四年「諸問屋名前帳」(旧幕府引継書)

(21) 註(8) 島田前掲論文、同「幕藩体制下の江戸材木の商体」(二)(徳川林政史研究所『研究紀要』平成五年度、一九九五年) など。

(22) 島田錦蔵『江戸東京材木問屋組合正史』(大日本山林会、昭和五一年)。もちろん、この川辺一番組古問屋の史料だけで、江戸材木問屋全般について言及できるわけではないが、類推は可能かと思われる。ただし、この『江戸東京材木問屋組合正史』に収められている史料のほとんどは、装丁が崩れている帳面で、乱丁が復元されて収載されているが、中には年代等の混乱も見られ、利用には十分注意を要することを指摘しておく。

(23) 「神田川川辺問屋規定帳」(東北大学狩野文庫所蔵)。この史料の所在については曲田浩和氏のご教示による。史料の詳細については、別稿で紹介するつもりである。

(24) 註(3) 加藤前掲論文(b) 二六四頁。

(25) 町田四八一二五

(26) 町田六三一二一四

(27) 『飯能市史』資料編民俗IV(飯能市、一九八三年) 三五〜四一頁。

(28) 町田六三一二三

(29) 町田六三一―一六四

(30) 町田六三一―一五一

(31) 町田六三一―一九〇、六三一―一七二

(32) 註(21) 島田前掲論文二五四―二五五頁。

(33) 町田六三一―二四・二五など

(34) 町田六三一―七

(35) 町田六三一―三三など

(36) 註(3) 加藤前掲論文(b) 二五二―二五四頁。

(付記) 本稿の作成にあたり、加藤衛弘氏、曲田浩和氏には大変御世話になりました。末筆ながら御礼申し上げます。